

# 腹黒CEOととろ甘な雇用契約

## 目次

腹黒CEOととろ甘な雇用契約

5

番外編 S系の恋人と蜜甘な旅行計画

271

腹黒CEOととろ甘な雇用契約

## プロローグ

夏のプールや朝の洗面所でよく聞かれるその水音は、おしゃれなカフェのテラス席には完全に似合いだった。

(え…………?)

顔に水をかけられたのだと気づいたのは、目の前の男が声を荒らげた時だ。

「言い訳するなよ、浮気女！ 今まで俺の部屋に何人の男を連れ込んだんだよ！ それに部屋からいつも金をくすねてるのも分かっているからな！ 警察に届けなければだめだ！ マグロだし味音痴だし…………おまえみたいな女と付き合っただのが、そもそもの間違いだったわ」

口を差し挟む隙すら与えずに、男がなり立ててくる。たたみかけるように投げられる侮蔑の言葉に気圧されてしまい、小坂新菜は言い訳すらままならない。

(つていうか、誰のことを言ってるの…………?)

新菜は混乱のあまり、前髪と顎から滴り落ちてくる水を拭うことも忘れ、ぼうつと桜田史郎を見つめていた。

それは確かに、今まで順調にお付き合いし、結婚の約束までしていたつもり、の『恋人』であり

『婚約者』の姿だ。

けれど今の彼は、どうしたらそこまで恋人を邪険にできるのかと問いたくなるほどの残酷さを、その目にこれでもかと孕んでいる。

爪の先ほども予想していなかったためか、新菜の頭はこの出来事にまだついていけないでいる。だから目の前で声を荒らげる桜田を、どこか他人事のように思っていた。

「…………史郎、くん」

「——今後もし俺につきまどったりしたら、訴えるからな！ 最低女！」

ようやく口を開いて彼の名前をぼつりと呼んだ時には、桜田は新菜との縁をすっぱりと断つように立ち上がり、冷え切った視線を投げて去っていった。

「…………」

怒濤の展開に茫然とし、しばらくみじろぎもできず…………どれくらい時間が経っただろう。固まった身体をようやくゆるゆると動かし、辺りを見回す。

桜田に水をかけられてから、周囲の客がひそひそと話しながら二人を見ていたのだが、頭が真っ白だった新菜はそれに気づいてもいなかった。

我に返って周囲に目を向けた頃には、何事もなかったように景色は動いていた。

海堂エレクトロニクスは、海堂ホールディングスを持株会社とするIT企業だ。東京に本社を置き、全国に事業所や子会社を展開している。

その中の一つ、桜浜事業所は、桜浜駅から徒歩十分圏内の海堂ホールディングス自社ビル内にある。新菜が勤務する桜浜事業所の総務部経理課は、十八階建て社屋の五階に据えられていた。

桜田に突然の別れ話をされた翌日。新菜はいつものように出勤した。

隣の部署である総務課に在籍している彼と顔を合わせるのは気まずい気持ちがあつたけれど、休むわけにはいかない。

というより、思いのほかショックを引きずっていない自分がいるのに驚いた。夜もすっかり眠れたし、朝ご飯もちゃんと食べている。

昨日呼び出された時は結婚を意識していたものの、そう遠くない未来にこんなことになるのでは……という思いも、心の奥底には少なからずあつたのかもしれない。

あれから、家に帰って湿った服を脱ぎ――

『振られちゃったものは仕方がないよね。……気持ち、切り替えよう』

お風呂から出た時には、そう思えるほど気分は回復していたのだ。

我ながら立ち直りが早いし、きつとすぐにふっきれるのではないかと、前向きな思いで会社に着いた……。のだが。

「おはようございます」

そう言つて経理課に入ろうとしたところで、周囲がどこか冷ややかな目で自分を見ているのに気づいた。

(え、何……?)

キョロキョロと見回すと、やっぱり遠巻きに冷たい視線を感じる。中には新菜を見ながらひそひそと立ち話をしたり、クスクスと嫌な笑い方をしている女性社員たちもいた。

訳が分からないまま経理課の自席へ着いた後、隣の席の後輩、飯塚に尋ねる。

「ねえ飯塚くん……何かあつたの？」

すると飯塚は、気まずそうな表情で目を泳がせた。

「あー……なんか、総務課の桜田さんが……」

「桜田くんがどうしたの……?」

「小坂さんが二股かけて自分を裏切ったとかで、えらい落ち込んで……」

「はい?」

新菜は眉根を寄せて聞き返す。

「あくまでも聞いた話で、僕が言ったわけじゃないですが、小坂さんは誰とでも寝るだの、浮気の常習犯だの、桜田さんの金を盗んでただの、そういうことを言ってるみたいです」

「はあ？」

その話に、普段は決して出さないようなテンションの声を上げた。

「それで、こういう動画が回ってきて……」

そう言っただけで飯塚がスマートフォンアプリのメッセージアプリを立ち上げ、受信画面から動画を再生する。

それは、昨日桜田から別れを言い渡されたシーンが撮影されたものだった。

\*\*\*

大事な話があるから——昨日は、一年半付き合った婚約者からそう呼び出されたのだ。新菜はきつと具体的な結婚の話を進めるのだろうと思っていた。

けれど実際に告げられたのは、予想もしていなかったひとことだ。

「別れてほしいんだけど」

「……え？」

なんと言われたのかよく分からなくて、新菜は首を傾げて聞き返す。

「だから、俺と別れてくれ、って言ってるの」

オーブンカフェの日当たりのいいテーブルで、爽やかな陽気とは真逆な冷たい言葉を浴び、飲み物を持つ手と声が震えてしまう。

「ど、どうして……？」

新菜の動揺を、目の前の男——桜田は汲み取ろうともしない。イライラとジャケットの内ポケットから数枚の写真を取り出して、テーブルの上に無造作に投げた。

「これ……」

「俺の友達がたまたま目撃して、写真を撮っておいてくれたんだ。……浮気するような女とは、これ以上付き合ってるらねえよ」

蔑むような目で見られ、新菜はいたたまれない気持ちで写真に目を落とす。

そこに写っていたのは、確かに彼女だった。奇しくも今二人がいるこのカフェで、コーヒーフラップを飲んでいる姿だ——男性と二人で、とても楽しそうに。

二枚目の写真は同じカフェで撮影されたもので、男性の顔が新菜のそれに被さっている写真だ。解釈によってはキスをしているように見えなくもない。

そして三枚目は——同じ男性と手を繋ぎ、桜浜駅近くのラグジュアリーホテルに入っていく写真だった。

確かにその三枚の写真を合わせて見れば、浮気をしていると勘違いしてしまうのも無理はないかもしれない。

けれど——

「史郎くん、私、浮気なんてしてない」

「じゃあこの写真は？ 完全に浮気だろ？」

桜田が三枚の写真をトトトン、と指で強く突く。

「これは偶然で……」

「へえ……偶然でキスまでするんだ？ おまえ」

「きつ……キスなんて、してない。これは——」

「目のゴミを取ってもらった、とか、陳腐ちんぷな言い訳するつもりかよ？ 鼻で笑うわ」

心底馬鹿にしたような視線を突きつけられながら、そう問われる。

桜田は声のポリウムを絞る気がなさそうで、その苛いら立たった声音は徐々に周囲の耳目を引いていった。

新菜は大きく目を見開いた後、すぐにその力を緩める。つとめて冷静を装よそおい、極力抑えた声で告げた。

「この日、風が強かったから目にゴミが入っちゃって、その人が見てくれたの。それに私、この人の落としたものを拾って——」

真相を告げようとした時、桜田が手にしたカップの中の水を新菜にかけた。そして身に覚えのない事柄をずらずらと並立て、彼女を責めるだけ責めて去っていったのだ。

別れを切り出されてから彼が去るまでの展開があまりにもあつという間だったので、新菜の頭はその速さにほとんどついていけなかった。

「よかったらこれどうぞ。返さなくていいですから」

呆ほうけていた新菜に、通りすがりの女性がハンドタオルを差し出してくれる。

「あ、ありがとう、ございます……」

頭を下げてそれを受け取った新菜は濡れた顔と頭と服を拭き、そして呟つぶやいた。

「……最初からこうするつもりで、お水、頼んだんだ」

カウンターでオーダーした時に、桜田はコーヒーと一緒に水を頼んでいた。いつもはそんなことをしないので、不思議に思っていたのだが——

（コーヒーかけられなかっただけ、ありがたいと思わなきゃなのかな）

「最後のコーヒーくらい、自分で払ってくれたっていいじゃない。……ま、いつものことか」

付き合っている間、こうした食事は割り勘か新菜が支払うことが多かった。一年半付き合っていて、桜田がごちそうしてくれた回数は片手に満たない。

今日のコーヒー代も、桜田はオーダーするだけでカウンターを離れてしまったので、結局、新菜が支払ったのだ。

「つていうか、浮気してたとかお金くすねてたとか、誰のこと言ってたんだろう……？」

桜田がわめいていた内容にまったく身に覚えがなかったことも、まともに反応を返せなかった一因だった。

まるで新菜の罪だと言わんばかりにあげつらっていたけれど、彼が言うような所業は一切していなかったのに。

「もう……訳が分からないよ」

新菜はため息をつき、トレーに載せたままだったレシートを取り上げる。その時、テーブルに置

かれたままの写真が目に入った。水に濡れてふやけたそれらを指で弾き、彼女は再び大きく息を吐く。

冷静になって考えると、『婚約者』といっても口約束だけだった。半年ほど前に食事をしながら「そろそろ結婚でもしてみる？」と言われたくらいで、それ以降、何一つ具体的な話は出ていなかったのだ。

その時点で自分は婚約したと思いついてたけれど、桜田にとってはなんの気なしに口走っただけで、本気ではなかったのだろう。両親に会ってほしいと言っても都合が悪いのだのなんだのと理由をつけて断られていたし、逆に彼の両親に会わせてもらったこともない。

でもまさか、こんな形で別れを告げられるなんて思ってもみなかった。

「浮気なんか……してないんだけどなあ……」

「ゴールデンウィーク明け——一年の内、もっとも爽やかで空気が美味しい季節だ。

けれど、五月の冴え冴えとした空は、今の新菜にとっては嫌味でしかなかった。

\*\*\*

『——今まで俺の部屋に何人の男を連れ込んだんだよ！ それに部屋からいつも金をくすねてるのも分かっているからな！ 警察に届けなければありがたく思えよ！ マグロだし味音痴だし……おまえみたいな女と付き合ったのが、そもそもの間違いだったわ』

『——今後もし俺につきまとったりしたら、訴えるからな！ 最低女！』

忌々しげに放たれた言葉が改めて新菜の胸に刺さり、昨日の痛みを思い出させた。

飯塚が教えてくれた話は、本当に自分のことなのだろうか。

（昨日も史郎くんが言っていたけど、何その嘘しかない噂……！）

「僕とか西屋さんとか……経理課で小坂さんにお世話になってる面々は、そんな話信じてないですけど。でも総務課では桜田さんに同情してる人が多くて、真に受けてる人もいるみたいです。さつき小坂さんに文句言いに来た人間もいました」

「ねえ小坂さん」

早速と言うべきか噂をすればと言うべきか——刺々しい口調で話しかけられて恐る恐る振り返ると、総務課の女王様こと前川リカが目元にブリザードを吹かせて立っていた。

きつめの美人なので、余計に怖さが際立っている。

「な、なんでしよう……？」

「あなた、うちの桜田くんのこと弄んでたんだって？」

「もて……あそんだ覚えは……ない……なんですけど、ね」

あくまでも穏便に、新菜は口元をひきつらせつつも、笑顔で応対する。

「だって桜田くん、今朝出社するなり青ざめた顔でため息ついてるし。どうしたのか聞いたら、あなたに裏切られて眠れなかった、って」

（あー……史郎くん、また嘘ついてるんだ……）



実は付き合っている頃から、桜田はちよつとした嘘をつくことがあった。待ち合わせに遅れた時に「テレビのインタビューに捕まった」だの、デートの時に財布を忘れてきただの、そういった類いのものだ。

けれど新菜に無実の罪を着せるような、えげつない嘘を堂々とつくなんて初めてだった。(史郎くん……そうまでして、私と完全に手を切りたいんだ……)

昨日は、桜田はとんでもない誤解をしていると困惑したが、新菜と別れたくて嘘をついたというのなら、悲しいけれど納得できてしまう。

どうしてここまで嫌われてしまったのか、まったく心当たりがなかったけれど。

「桜田くん、あなたの所業に耐えられなくて、別れ話をしたんだって。私の同期がたまたまその場に居合わせて、動画に撮ってたけど……みつともなさすぎ」

前川が新菜を見る目は、軽蔑の色で染まっている。完全に新菜を見下して馬鹿にした笑みを浮かべているのが、分かりやすくてかえって清々しい。

彼女はくどくどくどくどく、まだ何か言い続けているが、新菜は半分呆けながら、前川のことを見ている。

ブラウスの襟ぐりから肌色のサージカルテープが見えているけれど、ケガでもしたのかなあ……とか、耳にピアスの穴が何個も空いているなあ……とか、関係ないことをぼろろと考えるしまう。

我に返ったのは、彼女が声を荒らげた時だ。

「あなた聞いているの!？」

こうなつてはもう腹をくくるしかない。新菜は胸にじくじくと湧く痛みを押し込め、精一杯の作り笑いで前川に言った。

「まったく身に覚えのないことで、どうしてそこまで言われているのか私には分かりませんが、桜田くん『お大事に』って伝えてもらえますか？」

そして自分の机に向かい、仕事の準備を始めたのだった。

新菜は部署の同僚たちに事情を説明し、騒がせたお詫びをした。

彼女が元々真面目な性格なのを知っている経理課の面々は「水かけられて災難だったね」「風邪ひくなよ」などと声をかけてくれる。

彼らが噂を気にも留めずにいてくれるおかげで、普段と変わりなく業務をこなしていられた。ところが――

「小坂さんって三股かけてるんですって？ 人は見かけによらないって言いますが、ほんとですね……。どうやってたぶらかしてるんですかあ？」

昼休み前に、今度は他部署の庶務が出張精算書を持ってきて言った。前川ほどアクが強くないものの、人の噂が大好きな歩くスピーカーのような女性だ。

(三股って……一人増えてるし！)

クスタスと悪意のある笑いを放たれ、カチンときた新菜は出張精算書を突き返す。

「これ、宿泊先の領収書と精算書の金額の数字が合っていないので、お返しします。申請し直すよう、言ってください」

淡々とそう告げると、庶務の女は「え、うそ」などと口走りながら、精算書と領収書の数字を見比べた。そして悔しそうな顔をして自分の部署に戻っていく。

(いや、数字間違ったのは申請者なんだから、あなたが悔しそうにしくなくても……)

心でツッコミを入れてみるが、他人から悪意を向けられるというのは地味に精神を削られるものだ。

たったこれだけのやりとりで、HPとMPがごっそりと減っている。

他にも廊下を歩いている時に「ビッチ」と罵られるわ、「桜田さん可哀想〜」などとわざと聞かせるように言われるわで、新菜の悪口がここから聞こえてきた。桜田はどれだけ話を盛ったのだと苦笑せざるを得ない。

極めつきは、名前も知らない男性社員に呼び止められて、「小坂さん、誰とでも寝るんだって？ だったら俺もお願いでいい？ 今夜どう？」、「どんなテクニック持ってるの？ 教えてよ〜」などと、セクハラ発言を投げかけられたことだ。

さすがにこれには呆れ果てる。

「今の発言、セクハラですよね？ 録音したんで人事部に持ち込んでいいですか？」

そう言つてやると、慌てふためいて逃げていった。

そんな下品な男を二、三人いなしところで、新菜は息抜きのためにレストスペースに赴く。自販機でカプチーノを買うと、近くのベンチに座り込む。

朝からビッチだの三股だのと、何も知らない連中が言いたい放題言ってくれているが、そもそも

新菜の男性経験は桜田だけなのだ。彼が初めての男で、彼しか知らない。

経験の乏しいこんな自分が、男性を弄ぶ手練手管なんて持っているはずなのに。

(はあ……もう疲れたあ)

精神的には早くもギブアップしたいところだ。

その時――

「新菜、大丈夫？」

声をかけられると同時に、隣に腰を下ろしてくる影が見えた。

「慶子」

同期で友人の相馬慶子だ。

「桜田ったら、やるのが甘いよね。だってこれ、新菜が弁護士入れて訴えたら負けるわよ」

さすがに慶子は、桜田の嘘をはなから信じていないらしい。暴挙とも言える彼の吹聴を、鼻で笑っている。

「でも酷いよ！ 動画まで拡散するなんてさ！ 新菜、訴えてやりなよほんと！ SNSに悪行上げてやれ！」

さりげなく(?)話に参加してきたのは、これまた同期の吉岡紗良だ。えらく荒々しい鼻息で、新菜の斜め前にあるスツールに座る。

この二人には昨夜の内に事情を話しておいたので、新菜と桜田がどういういきさつで別れたのかを知っていた。

「それにしても、一体どういうつもりなのかしら、桜田」

「いっそあいつの本性明かしてやればいいのよ、新菜！」

「まあ……それで周りが信じてくれれば苦労はないよね」

どうやら噂は結構な範囲まで広まっているらしい。それをどう収束させたいものか。

桜田は社内ではイケメンで通っており、表向き人懐っこい性格も手伝って、女性社員からは人気がある。

そんな彼が付き合っていた女から裏切られた末、フリーになった。きっと、傷心の彼を慰めつつ後釜に座ってやろうと狙う女性が多数いるはずだ。

そういう女性たちが噂の着火剤となっている可能性が高く、桜田はそれを見越して火種を投げ込んだのだろう。

「誰かに何か言われたら、私に言いな！ ボッコボコにしちゃう！」

紗良は可愛らしい容姿とは相反して、性格は結構過激である。しかも趣味でキックボクシングをやっているのだ。座りながらファイティングポーズを取る姿も、なかなか様になっている。

「紗良、格闘技やってる人は素人さんには手を出しちゃダメだって。……まあ、私もそうしてやりたいけど」

慶子が笑いながら言った。聡明な美人である彼女には慶子という名前がよく合っている。

「二人が味方でほんとよかった。それだけでも安心できる」

「ま、最悪の場合はマジで弁護士入れちゃいなさいよ」

「弁護士がめんどくさかったら、私がいつでも鉄拳制裁！」

「ん……」

二人の慰めに、新菜はホツとして笑みを見せた。

しかし今日一番の試練は容赦なく訪れる。

経理課のコピー機が故障し、メーカーに点検・修理を依頼した。その間、隣の総務課のマシンを借りることに。

新菜も例外なく、コピーをしに総務課へ赴かねばならなくなる。

よりにもよって今、この時に、だ。

総務課と経理課は隣同士ではあるが一応壁で仕切られているので、あちらからの雑音はシャットアウトされている。そのおかげでここまで幾分かは助けられていたけれど。

（あ………胃が痛い）

総務課のドアの前で、新菜はお腹を擦った。

いくら腹をくくったとはいえ、敵の本丸にたった一人、丸腰で突入するようなもの。針のむしろだ。

新菜はドアを小さくノックし、ドアノブを回してそっと中へ入る。

「コピー機、お借りします」

そう声をかけた瞬間、その場にいたほぼ全員が顔をこちらに向けた。

「……」  
侮蔑や下卑の意を含んだ視線が、新菜に突き刺さる。しかし当の桜田は、気まずそうに目を逸らした状態だ。

あることないことを吹聴したのを自覚しているのだろうが、その姿を『裏切られたのがつらくて、元カノを正視できない』として受け取る者もいるだろう。

気にしても仕方がないので、コピー機へ向かい、原稿をセットする。結構な枚数をコピーしなければならず、それを待っている間がまた苦痛だった。

「よくここに来られたよね……」

「面の皮が厚いから、二股とかできるのよ」

「桜田くん、可哀想……」

などという声が後ろから聞こえてくる。

（あーあー、聞こえない聞こえない）

気持ちの上では耳を塞いでいるつもりだ。実際にはコピー機の稼働音を耳栓にして、雑音を右から左へ受け流している。

「ぐう……っ」

突然、後ろのほうで呻くような声とガタンという音がして、それから誰かが駆け出す足音が聞こえてきた。

視界の端っことで、桜田が口元を押さえて総務課から出ていくのが見える。

「ちよ……桜田くん、気持ち悪そうだったんだけど！」

「あの女の顔見てたら思い出したんじゃない？　なんか、桜田くんの部屋に浮気相手連れ込んでるところに出くわしたらしいから」

（ちよっ、いつの間になんか話に……！）

こう言っってはなんだが、桜田の部屋は整理整頓とは無縁で、浮気相手どころか普通に友人を入れるのすら躊躇する魔窟だ。整理収納アドバイザーの資格を持っている新菜が、彼の部屋を訪れるたびに掃除や整理整頓をしていたくらいなのだから。

それに新菜は彼の部屋の合鍵を渡されていなかったたので、他の男など連れ込めるはずもない。

（よく後から後からえげつない作り話を思いつくものよね。それに何？　今の演技、アカデミー賞でも狙ってるの……？）

あのお涙ちようだいのもの『元カノの顔を見てトラウマに襲われて吐き気をもよおす』姿も、もちろん演技だろう。あんなしおらしい桜田なんて、今まで見たこともない。

新菜の悪印象を周囲に植えつけるためだけの、浅はかなパフォーマンスに違いはないのだ。

（こうして冷静になっただけで考えてみると、史郎くんってロクでもない男だったのね……）

慶子と紗良に言ったら「今頃気づいたの!?　これだから恋は盲目と言っただけ——」なんて、こんなと説教されそうなることを、新菜はしみじみと思った。

そんなことを考えている間にコピーは終わる。さあ、とつと出ていこうと冷やかな視線を跳ね除けて総務課の外へ出ると——

「きゃっ」

ちようど総務課に入ろうとしていた女性とぶつかってしまった。

「あつ、すみません！」

危うくコピー済みの紙をぶちまけそうになったが、なんとか二、三枚落としただけに止まる。

「いえ、こちらこそ。すみませんでした」

女性はにこやかな態度で、落ちた紙を拾ってくれた。

「あ、ありがとうございます」

(あ……この人)

ちよつと見ない美人のその女性は、秘書課の篠山乃梨子だ。

経理課にも時々やってくるので、新菜も顔と名前くらいは知っていた。美人なのにツンケンしておらず誰にでも優しい、男性社員から絶大な人気を誇る女性社員である。

お互い会釈をしてすれ違おうと、乃梨子が総務課に入っていく。途端――

「篠山さん！ こんにちは！」

「今日もきれいですね、篠山さん！」

新菜が入室した時とは百八十度違う反応が飛び交っていた。

(まあ、ほんとにきれいな人だから、分からなくもないけど……)

――それにしたって反応が露骨すぎやしません？

新菜はごくごく小さな声でそう呟いた。

それから地味に嫌がらせが続いた。

噂は総務部だけではなく、他部署にも波及し、わざわざ「彼氏を弄んで捨てて水をかけられた

三股ピッチはどんな女だ」と見に来る社員まで出る。

「違うフロアから噂の対象をいちいち見に来るとか、暇人が多いんですね、うちの会社」

飯塚がPCに目をやりながら、冷たい口調で言った。

「そうだね……飯塚くんは彼女のこと大事にしてあげてね」

「僕は桜田さんとは違うんで」

疲れた口調で新菜が言うと、彼はきつぱりと返す。

飯塚の彼女は他の会社に勤めている。本人曰く「付き合いは極めて順調」だそうだ。彼は特別イケメンというわけではないが、清潔感のある見た目で好感が持てるタイプ。

(いいな……彼氏に大切にされる彼女が羨ましい)

新菜はこっそりため息をついた。

事の始まりは、桜田に振られる一週間前の週末だった。

新菜は彼に贈る誕生日プレゼントを選びに、桜浜駅近くのショッピングモールへ行った。

今年は時計が欲しいと言っていたので、チタン製のクロノグラフにしようかとあちこちの店を覗く。

いくつかの候補を自分の中で決めつつ、どれにしようか悩みながらモールの中を歩いていると、バサリと目の前に何かが落ちてきた。

「っ、何……?」

拾ってみれば、それは銀行の封筒だ。

(え……ということ……)

結構な厚みのあるそれには、現金が入っているようである。

慌てて前を見て、スーツ姿の男性が片手にカップのコーヒーを持ちながら、空いた手で自分のジャケットのポケットを探っているのに気がつく。

探っている時に落としたのか、落としたことに気づいて探っているのか分からないけれど、とにかくこの封筒の持ち主はこの男性だと確信し、新菜は声をかけることにした。

「あの……もしかして、探しているのはこれ、ですか?」

おずおずと封筒を差し出すと、男性が振り返る。

(うわ……きれいな男の人……)

まるでスクリーンから抜け出てきたのではないかと錯覚するほど、美しい男だった。

どことなく外国の血が入っていると思わせるような彫りの深さ、目元はくっきりとした二重まぶたで、切れ長なところは日本人らしい。整った隆鼻の下には美しい形のくちびる。

黒茶のサラ髪がナチュラルにセットされていて清潔感にあふれている。

背は百八十五センチはありそうだ。百五十八センチの新菜は完全に見上げてしまう。

まるでそこだけ女優ライトでも当てているのかと思うくらい、あまりにもきれいでキラキラしているの、眩しくて目をばちくりさせていると、男性の輝きがさらにギアを上げた。

「ありがとうございます。落としていたんですね……私としたことが」

低く通る美声でお礼を述べた後、彼は財布から一枚の紙を取り出す。

「今のところ、私のものだと証明する手立てがこれしかないのですが」

それはお金を下ろした銀行と金額が記載されている、取引明細書だった。

封筒に印刷されている銀行名と同じだし、厚みから推測する金額もそれくらいだ。

「あ、別に疑ってはいないので、大丈夫ですよ」

新菜は胸の前で手を振る。

彼のスーツはいかにもオーダーメイド然とした仕立てのよさが滲み出ているし、立ち居振る舞い

も品がある。

大金を持ち歩いていてもなんら違和感のない風貌だ。

「これがなければ今日の支払いが滞るところでした」

彼は肩をすくめて笑った。

(そんな大金を現金でやりとりすることもあるのね……)

下世話ではあるが、封筒を拾って持った限り、百万円は入っていた気がする。

現代社会ではキャッシュレス化が進みつつあるが、現金至上主義者というのがまだ少なからずいるのは知っていた。特に日本では、未だにクレジットカードが使えない場面が多々ある。

請求書を送り振込を待つ、ということすら信用していない古い経営者もいるのだ。目の前にいるこの男性がそうだとは思わないけれど、相手先がそういう主義なのかもしれない。

(でも、大金をなくさないでよかった!)

他人事ながら新菜はホッとした。当人ならなおさらなように、男性が安堵の表情を見せる。

「本当に助かりました。もしよければ、お礼をさせていただきませんか？」

「ただ拾っただけですし、そんな大げさな」

「それでは私の気がすみません」

「いえ、あの私、用事がありますし——」

「いえいえ」「いやでも」の応酬を何度か繰り返した後、新菜がもう一度遠慮しようとして上げた手が、彼の手にしていたコーヒーカップを弾く。

「あっ」

声を上げた時にはもう遅かった。中に半分ほど残っていたコーヒーが、新菜の服にパシャンとかかる。

五月の中旬——コートは着ていなかったため、ブラウスとスカート双方にべったりと琥珀色のシミができた。

「申し訳ありません！」

男性が整えられた髪を振り乱さんばかりに、勢いよく頭を下げる。

「いえ、ごぼしたのは私ですし……っ」

「もうぬるかったのでやけどはないと思いますが、洋服を汚してしまいましたね。弁償させてください」

慌ててポケットからハンカチを取り出し、「これで拭いてください」と、新菜に手渡した。彼女は言われるがままにそれで濡れた部分を拭く。

「あ……いえ、弁償なんて……」

控えめにそう言っではみたものの、このままでは家に帰るところか、町を歩くのとはばかられる。どこかで服を調達したいのは確かだ。

「女性に恥をかかせた上にこのまま帰すなんてことになったら、親に勘当されてしまいます。お願いですから、弁償させてください」

あまりにも必死な表情で言ってくるので逆に申し訳なくなり、新菜は苦笑しつつうなずいた。

「じゃあ……あそこでお願いしてもいいですか？」

新菜が指差したのは、ちょうどそばにあったファストファッションの店だ。そこでなら服を買ってもらっても、罪悪感はずほど湧かないだろう。

けれど彼は大げさに目を見開いて、かぶりを振った。

「とんでもない！ 弁償でファストファッションなんて押しつけたら、末代までの恥です。私がひいきにしているサロンが近くにあるんです。行きましょう」

(サ、サロン……?)

驚きを隠せない新菜をよそに、彼はその美しい顔に優美な笑みを寄せ、彼女の手を引く。

彼はそのままショッピングモールを出て、連絡口から隣にあるラグジュアリーホテルに場所を移した。

途中、男性は「私は中邑航洋なかつむらつと言います。小さな会社を経営しております」と自己紹介をする。

新菜は新菜で「小坂新菜です、会社員です」と小声で名乗った。

ホテルの地下には高級ブランド店が軒を連ねており、中邑はその中の一つであるファッションブランドの店舗に入ろうとする。もちろん、新菜の手を引いたままで、だ。

(え……アルフレッド・ゴスつてすごく高いって聞いたけど……)

英国の有名ファッションデザイナーの名前を冠したそのハイブランドは、新菜ももちろん知っていた。洋服一枚で、彼女が住んでいるマンションの家賃が飛んでいくほどの価格設定だったはずだ。

(いくらなんでも、ここは……)

「あ、あいつ、こんな高級なお店なんてダメです！」

「どうして？」

「たかがコーヒーこぼしたくらいで、申し訳ないです……っ」

「恐縮する必要なんてないです。むしろ私に任せてもらえると嬉しい」

中邑が優しく笑い、新菜の背中に手を添えて店の中へ足を踏み入れた。

「どうも、お世話になります」

「これは中邑様、いつもありがとうございます」

挨拶した彼を、店員の女性がにこやかに出迎えてくれる。三十代後半くらいだろうか。落ち着き

のあるたたずまいの、上品な雰囲気をもった女性だ。

「西崎さんすみません、このお嬢さんに似合うものを見繕みつくろっていただけませんか。見ての通り、私の不調法で服をダメにしてしまいました。彼女は小坂新菜さんといいます」

「それは大変でございましたね。かしこまりました。小坂様、こちらへどうぞ」

西崎と呼ばれた店員が新菜を促した。

新菜はあたふたして声を上げる。

「あ、あの……！」

「はい、小坂様は何かご希望がおりますか？ タイプやお色など」

ニッコリ笑う西崎に、う、と言葉が詰まった。

「……いえ、なんでもありません。お任せ、します」



(まさかこの状況で「一番安いものでお願いします」なんて言えないよ〜！)

そんなみみっちい要望を口にすれば、中邑に恥をかかせてしまうことになるだろう。新菜にだってそれくらいの空気は読める。

彼が自らこのブランドを選んで新菜を連れてきたのであって、彼女がわがままを言っただけを指定したわけではないのだし。

それにこんな高級ブランドを巻き込んで新菜を騙し、高額なものを買わせるような詐欺(さぎまが)的なことをするとは思えない。

とりあえずは様子を見つつ、二人に身を任せることにした。

西崎はまるで自分のものを選ぶように、満面の笑みで何着もの服を新菜に当てる。

「このような可愛らしいお嬢様のお召しものを選ばせていただくのは久しぶりなので、少々張り切っております」

弾んだ(は)聲音で告げてきた。

「そうですね。私も眼福です」

中邑もまたニコニコと笑みを絶やさずに、候補が次々に出てくるのを楽しんでいるようだ。

新菜は自分が着せ替え人形にでもなった気分になる。

西崎が選んでくれたのは、すべてセンスがよく品もよいものだった。さすが専門家、といったところだ。

だから、どれがいいかと尋ねられても、迷ってしまう。

結局、薄いアイボリーのフレアスリーブブラウスに、ピンク地の花がらのフレアスカートを、西崎にコーディネートしてもらった。

しかも彼女は、それに合うアクセサリーまでセットにしてくれたのだ。

「ああ、とてもよく似合いますね」

中邑が目を細めて褒めそやしてくるが、新菜はなんだか落ち着かない。自分が着ている服を矯(た)めつ眇(す)めつ眇めながら、不安を隠せず尋ねる。

「本当にいいんでしょうか……？　なんだか私にはもったいないです」

「そんなことはないです、すごく可愛いです」

「とってもよくお似合いですよ」

西崎が自身の仕事に大満足な様子でうなづく。その笑みには達成感が見て取れた。

(言われてみれば……)

店内に置かれた姿見を覗いて、確かにこの服は自分に似合っているかもしれないと新菜は思う。

肩より少し上の茶髪、色白で甘めの顔に、選んでもらった服が映(は)える。

全体的に華奢(きゃしゃ)なので、エアリーなラインがきれいに出ているし、今履いている薄茶系のパンプスにもちようど合う。

「西崎さん、当然ですがこのまま着て帰りますので、タグは切ってください」

「かしこまりました。着ていらしたお召しものはいかがいたしますか？」

彼女に水を向けられた新菜は、申し訳なく思いつつも言う。

「あ……帰ったらクリーニングに出しますので、そのまま袋に入れていただいてもいいですか？」  
「かしこまりました。……中邑様、そういうことでよろしいですか？」

西崎が今度は中邑に目を向けた。

「彼女がそう言うのならそれで。クリーニング代は後で渡しますので」

「いえいえ！ もう、この服をいただいただけで十分すぎるほどです。クリーニングは自分で出しますので大丈夫ですから」

ただでさえ、選んでもらった服とアクセサリーの金額をざっと頭の中で予想し、冷や汗が出そうになっているというのに、その上クリーニング代まで受け取ってしまっただけはバチが当たるだろう。

(た、多分、服だけで私の月収が軽く飛んでく……)

「じゃあ、この場はそういうことにおきましようか。……では小坂さんはあちらで待っていてもらえますか？」

中邑が中ほどにいくつか並べられた高級そうなスツールを指差した。

言われるがままに腰を下ろした新菜は、存外な座り心地のよさにさすが高級ブランド店だと感心する。

彼のほうに目をやると、カウンターで支払いをしているようだった。

あまりじろじろ見ているのも失礼かと思いつぐに目を逸らしたのだが、一瞬だけ目に入ったのは、金属製クレジットカード——いわゆるプラチナカードだ。

(やっぱりそういう人なんだ……)

それくらいの資産家でないと、会ったばかりの女にこんな超高級店で洋服をポンと買い与えたりなどできないだろう。新菜はすんなり納得した。

緊張しながら座って待っていると、しばらくして中邑が近づいてきた。手には大きなショッパーを持っていて。新菜が元々着ていた服が入れられているらしい。それを彼女に手渡し、中邑は改めて頭を下げた。

「小坂さん、本当に申し訳ありませんでした」

「いえ、こちらこそ、こんな素敵な洋服をいただいてしまって恐縮しています。本当にいいんでしょうか……」

何度も問うのはしつこいし失礼だとも思うが、本当に不都合なお詫びに、ありがたいと思うよりも、恐れ多い気持ち先が先に立ってしまうのだ。

「そんなに申し訳ないと思ってくださるなら、私のこぼしたコーヒーをあなたにごちそうしていただく、というのはどうでしょう？」

「え……」

中邑の突然の提案に、新菜は少し躊躇した。けれど、コーヒーくらいなら……と、うなずいて立ち上がる。

西崎にお礼を告げ、二人はホテルから出て駅に向かう。そして駅前にあるカフェに入ると、新菜はコーヒーとコーヒーフラップを注文した。

「テラスでもいいですか？」

中邑がコーヒを持って外のテラス席に腰を下ろしたので、新菜はその前に座る。

「今度はこぼさないようにしないと」

笑って言う。

「本当にかさねがさね申し訳ないです。……でも小坂さんには不快だったでしょうが、あなたのような可愛らしいお嬢さんと知り合えるのなら、こんなハプニングも悪くはないかな、と思えますね」

甘く目を細める中邑に対し、新菜は目を丸くした。

「中邑さんは女性を褒めるのがお上手ですね」

「本心ですよ」

コーヒークップを手の平で覆うように持ち上げて、中邑が笑う。つられて新菜もクスクスと笑った。

「——それにしても、あんなふうには現金を落とすとは思いませんでした。弟にいつも言われているんです。『兄さんはもつとお金に執着したほうがいい』って」

「それは弟さんが正しいですね。私がもし悪い女だったら、素知らぬ顔でポケットに入れてましたよ？」

意地悪く言うと、彼は苦笑いする。

「小坂さんご兄弟は？」

「私にも弟がいます。実家住まいの大学生で、先日内定が出たって報告が来ました」

「それはおめでとうございます」

新菜の弟の新一いんちは理系の大学生で、有名信用調査会社に就職内定したところだった。そこではシステム開発の仕事をする予定だそうだ。

「中邑さんは弟さんのこと、とても可愛がってらっしゃるんですね」

「え……」

新菜の突然の言葉に、中邑が目を見張る。

「だって、弟さんの話をしていた時、中邑さん、とても優しい目をしてらしたから」

彼の引き締まったまなざしが瞬時にして柔らかいものになったのを、新菜は見逃さなかった。彼女も四歳年下の弟と仲がいいので、なんとなく分かるのだ。

「そう、ですか……」

指摘された中邑は、照れたように頬をかいた。その姿を見て、新菜は心がほっこりと温かくなる。次の瞬間、心の中とは逆に少し冷たい風が吹いてきた。強めのそれは地面に落ちていた葉や屑くずを巻き上げる。

「あ……風出てきましたね」

「中に入りますでしょうか」

「そうですね……っ、あっ」

二人して立ち上がるうとした瞬間、新菜は目をつぶった。

「どうしました？」

「……目にほこりが入ったみたいです」

片目を閉じたまま、まぶたを手で押さえる。

「大丈夫ですか？ 見てさしあげましようか？」

「いえ、大丈夫です。目薬差しますので」

目をしばしばと瞬かせると、中邑が心配そうに覗き込んできた。

「……ああ、目が充血してますね。痛そうですね」

新菜はバッグから目薬を出して差す。涙と一緒にほこりも流れ出たのか、ようやく痛みが和らいだ。

ほう、と息をつく。

「私がテラスに出たせいで……すみません。あの小坂さん、もしよければこのままここを出て、お食事でもいかがですか？ いい店を知っているんです」

中邑が駅のほうを指差した。

新菜は困って眉根を寄せる。

「あー……お誘いは嬉しいのですが、私、お付き合っている方がいるので、他の男性と二人で食事というのはちよつと……」

このお茶だつて本当は躊躇したのだ。

でもあまりにも頑なに断るのもどうかと思つたし、何より服を買ってもらつた負い目があつたので、お茶くらいなら……と同行したままで。

「どうしてもダメですか？」

「すみません」

探るように見つめられたが、新菜は申し訳なく思いつつもぎつぱりと謝罪する。

「分かりました。……残念ですが、食事は諦めます。でも、これだけは受け取ってください」

そう言つて、中邑が財布の中から一万円を差し出した。

「？ なんですか？」

「クリーニング代です」

「これはいただけません。洋服を買っていただいたのに」

新菜が首を横に振っているのに、中邑は引かない。

「せめてものお詫びです」

「ですから、お詫びでしたらもう十分なので」

これだけは受け取れないと、新菜は固辞する。意固地とも言えるその態度に、彼は諦めたような表情で息をついた。

「……分かりました。無理に押しつけてもご迷惑ですしね。残念ですが、これは収めることにします」

一万円札を財布に戻す。

「すみません、ご厚意を突っぱねるようなことを言つて。本当にもう、この服だけでも余るほどのことをしていただいたので」

これ以上の『お詫び』を回避することになんとか成功した新菜は、安堵しつつ立ち上がる。

「——私、そろそろお暇します。……本当にありがとうございます、中邑さん」

「……いえ、こちらこそ申し訳ないことをしました。その服、本当によく似合ってますのでよかったです」

中邑がきれいに笑った。

「では、失礼します。ありがとうございます」

深々と頭を下げて、新菜はカフェを後にする。

一度だけ振り返ると中邑と目が合ったので、会釈をして今度は本当にその場から去った。

「……あ、一応念のために連絡先を伝えておいたほうがよかったかな」

そう気づいたのは、桜田への誕生日プレゼントを買った後だ。

でも、その時の新菜にはそんなことはどうでもよくて。

「史郎くん……気に入ってくれるといいなあ」

きれいにラッピングされた腕時計の箱を見て、そう呟いていた。

結局そのプレゼントは渡せなかったのだけれど。

## 3

「——何なに？ 『小坂さんの××××を見せてください』……キモい。キモすぎる」

「こっちは『尻軽ビッチ！ 海堂エレクトロニクスの面汚し、早く辞めろ』だって、えげつな！」

慶子と紗良は新菜から差し出された紙切れに目を通すと、嫌悪感丸出しの顔で毒づいた。

ねつ造された新菜の悪評が広められて四日が経つ。

新菜は経理課長を含めた課員にことの経緯を説明し、誤解を解いた。

直接話ができたこと、常々桜田の人間性に疑問を持っていた人もいたことで、自分の周囲の社員には理解を得られている。

けれど、その他の親しい付き合いのなかった人間からは、ふしだらな女認定されていた。

すれ違いざまに下品なことを言われたり、ロッカーに嫌がらせの手紙が入っていたり、机の中に避妊具が置かれていたり、一部上場企業とは思えない無秩序ぶりに、新菜と彼女擁護派は呆れかえっている。

一応、上司から他部署に注意喚起してもらったものの、大した改善は見られず。

しかも、通勤時や帰宅時に誰かが新菜の後をつけている気配も感じられ、少し怖くなっている。とりあえず、なるべく人通りの多い明るい道を歩くよう心がけた。

今までなんとか受け流していたつもりの新菜も、さすがに疲れる。

金曜の定時後にぐったりしていたところを慶子と紗良に食事に誘われた。会社近くの創作イタリアンレストランへ行き、アペタイザーとワインを注文する。

そして、料理が来るまでの間、新菜は帰り支度をしている時に引き出しで見つけたメモ用紙を二人に見せたのだ。

「いい年した大人がこんな下品なメモ書くとか、ありえないんですけど」

慶子が手にしていたメモを汚そうに摘まんで、新菜に返す。

「案外、桜田自らやっってるんじゃないの？ ほんとアイツ、ボコりたいわー」

紗良は握りこぶしをグーパーさせながら吐き出した。

新菜は二人にとりあえずは何もしなくていいとお願いする。もしもの時に味方になってくれさえすれば、と。

今のところ、慶子も紗良もおとなしくしている。

「私……もう辞めようかなー」

疲れた口調でぼそりと呟くと、二人が身を乗り出した。

「新菜！ あんなヤツに負けちゃダメ！ やっぱ私がボコるから！」

「もし辞めるにしても、アイツの化けの皮剥がしてからのほうがいいわよ、新菜。多分、桜田はそれを狙ってるんだらうし」

「それって？」

紗良が慶子に問う。

「だから、新菜が悪評に耐えかねて退職願を出すことを、よ。そうでもなきや、あんな一気に嘘八百流したりしないわ。噂が収束しない内に新菜の精神壊して辞めさせるつもりなのよ」

「ええー！ 悪質にもほどがある！ ……ね、新菜、やっぱアイツボコろう？」

さつきから血気盛んに報復を提案する紗良を「まあまあ」となだめながらも、新菜はうなだれた。

「実は私も、そんな気がしてるんだよね……」

あれからも桜田は被害者のような顔をして、周囲を味方につけている。噂が収束しないよう、絶えず火種を投げ込んでいる節も見られた。

こんなところでサラリーマンをやっているより、俳優にでもなるべきではないかと、新菜は心の底から思った。

それにしても。

精神衛生上、今の状況に耐えられるのもそう長い期間ではなさそうだ。完全に病んでしまう前に転職を考えたほうがいいかもしれない——そんなことを考え始めている。

「とにかく！ 本当に辞めたくなかったら一度相談してよね、私たちに」

「うん、分かった」

紗良の言葉に、新菜は笑ってうなずいた。

それからは料理を何品かシェアし、小一時間ほどで店を出る。そして桜浜駅前で、JR組の慶子と紗良、私鉄組の新菜は別れた。

新菜は私鉄の改札口に向かい、自動改札を通るためにバッグからIC定期券を取り出す。その利  
那——

「小坂さん！」

自分の名を呼ぶ男性の声がして、振り返る。

「あ……な、かむら……さん？」

紛うことなき、中邑航洋だった。

相変わらずキラキラをまき散らす美形で、夜も更けているというのどこか眩しい。高級そうな  
スーツ姿も先日と同じだ。

そんな彼がわずかに目元を緩めながら、新菜に声をかけてきた。

ある意味、今の新菜の苦境の原因となった男性だ。正確に言えば彼のせいではないので恨む気持  
ちなどはないけれど、心中は少し複雑だった。

「こんばんは、あなたを待っていました。お時間いただいてもいいですか？」

「え？ どうして——」

——私を待っているんですか？

——私がこの駅を使うと知っていたんですか？

そんな疑問を孕んだまなざしで中邑を見ると、彼は肩をすくめる。

「後ほど説明いたしますので、場所を移しませんか？ 小坂さんが好きなレストランでも居酒屋  
でも。できれば個室があるところがいいのですが」

「あ、はい。じゃあ……」

新菜は少し考えた後、彼を先ほどのレストランの隣にある和食系の居酒屋へ案内した。

ここは居酒屋と銘打ってはいるが、比較的喧騒が少なく個室が多い。案の定個室内は静かで、落  
ち着いて話ができそうだ。

新菜はすでに満腹だったが、中邑がメニューを広げ「お刺身なら少しはいけるのでは？」と、刺  
身の盛り合わせを頼む。それに加え、話をするために二人ともとりあえずはノンアルコールの飲み  
物を注文した。

新菜はシャーリー・テンプルを、中邑はノンアルコールビールだ。

「中邑さん、お話ってなんですか？」

飲み物が来たところで、新菜は中邑に切り出した。水を向けられた彼は、大げさなくらいに眉尻  
を下げて答える。

「私は、あなたに謝らなければなりません」

「あ……先日、たくさん謝っていたきましたけど？」

もったいないくらいのお詫びの品とともに、散々謝罪の言葉を聞いたつもりだ。これ以上の謝意  
は必要ない。

「そうではありません。……まず私ですが、こういう者です」

中邑が胸ポケットの名刺入れから一枚取り出し、新菜に差し出した。彼女はそれを恭しく受け  
取り、目を落とす。

「皆川<sup>みながわ</sup>データーサーチ株式会社、代表取締役社長兼CEO……皆川航洋……。え？ 皆川って……」  
新菜は困惑を隠せず、名刺と中邑を交互に見た。

『中邑』は母の旧姓なんです。先日は偽名を名乗っていました。本名は皆川航洋といって、皆川データーサーチという調査会社の最高経営責任者しております」

中邑改め皆川航洋は、申し訳なさそうにノンアルコールビールを口にする。新菜もカクテルに口をつけた。

「なか……皆川さんなのは分かりました。それで、そのことをわざわざ謝りに？」

「いえ、本題はこれからです。あの日、私がああなたの目の前でお金を落としたのも、コーヒーをこぼしたのも、実はわざとだったんです」

「え……」

確かに考えてみれば、あんなふうにいきなり現金の入った封筒を落とすなんて不自然ではある。

けれどまさか、見ず知らずの人間の前で大金を落とすというリスクなことをわざとするなんて、誰も思わない。

現金には記名などしないのだから、先日新菜も言ったように、拾った人間が我が物顔で懐<sup>ふところ</sup>に入れてしまっても仕方がない。

そういった危険を冒してまで、自分にそのようなことを仕掛ける理由はなんだろう。

新菜は心の中でうーんと唸<sup>うな</sup>る中。

「私は桜田史郎から頼まれて、あなたを調査していました」

「し、史郎くんから……？」

皆川の意外すぎる言葉に、煮詰<sup>に</sup>まっていた新菜の頭の中がさらに混乱を極めた。

「調査とは言っても、正式な依頼ではありません。彼は私の弟の友人なのですが、私の目で、直接あなたの本性を確認してほしいと頼んできました」

彼がCEOを務める皆川データーサーチ(MDR)は業界第三位の信用調査会社だ。皆川が大学卒業と同時に立ち上げ、その手腕によって十年で業界三位にまでのし上げた。今や多くの一部上場企業を顧客として抱えている優良企業である。

「二週間前、彼からあなたと別れたいと相談を受けたんです」

曰<sup>い</sup>く、桜田は新菜についてこう言ったそうだ。

『今の彼女が、とんでもない男たらしで浮気は日常茶飯事<sup>さまじ</sup>、自分の他にも付き合っている男が何人もいて、金にもだらしなく、自分の家から何度も金をくすねている。いい加減別れたいが、どうしても別れてくれない——』

正式に調査を頼む前に、皆川に直接彼女を見てくれないかと頼んできたらしい。

「史郎くんがそんなことを……」

そういえば、会社でも飯塚が似たようなことを話してくれたのを思い出した。

当然ながら、新菜は男にだらしなくなどないし、彼のお金を盗むなんて考えたことすらない。あまりにもでたらめばかりで、呆れ返る。

「桜田が正式な依頼をしなかったのは、第一に、ちゃんとした調査をすると、あなたが潔白である



とバレてしまうからです」

「……皆川さんは、私を信じてくださるんですか？」

新菜は皆川の目をじっと見て尋ねた。

「あの日、私はいろいろな方法でああなたの『本性』とやらを引き出そうとしました。わざと大金を落としたり、高級ブランド店に連れていったり、お金に無頓着だと装まもってみたり、プラチナカードで支払いをしたり、あなたを褒めて誘よそったり——でも、あなたはどの釣り針にもかからなかった。それに何より、私にはあなたが桜田の言うようなだらしのない女には見えなかったんです」

(私のことをほとんど知らないのに、信じてくれるの……?)

会社には何度説明しても信じてくれない人間もいるのに、目の前の彼は、見ず知らず同然の新菜を信じてくれると言う。その表情は、嘘をついているようには見えなかった。

「——私は一応、その道のプロです。人を見る目にはそこそこ自信がある。そんな私から見たあなたは、思慮深くて誠実で、少し頑固ですが……可愛らしい女性でした。だからどうしても納得できなくて、個人的にあなたを調査しました。結果はもちろん、予想していたとおりで。そこでようやく、あなたに抱かかっていたイメージがじっくりときたんです。そして私は同時に、桜田史郎についても調べました」

一旦話を切り、皆川は来たばかりの刺身に手をつけた。

「ああ、このお刺身はいけますね。なかなか新鮮だ。小坂さんも食べられるようなら是非」

「あー……はい。じゃあ少しいただきます」

新菜は一瞬躊躇ためらうも、マグロの刺身に箸はしを伸ばす。

「——あ……美味しい、です」

偽いつわりない気持ちではあるが、少しぎこちなく告げると、皆川が箸はしを置く。

「それで、桜田史郎のことなんです……あなたにとっては、少しばかりつらいご報告になってしまいかもしれない。それでも……お聞きになりますか？」

「つらいも何も、もう今さらです。あんな目に遭あわされた以上につらいことなんてないです。……教えてください」

「そうですか。では、包み隠かくさずご報告します。桜田史郎は、真っ黒でした。あの男は根っからの褒め称ほめえなくなるほどの詐欺師さぎし体質たいしつですね」

そう言って封筒をテーブルに置いた。

角形2号サイズのそれには、製本カバーとクリップでまとめられたA4サイズの書類が入っていた。表紙に『調査報告書』という文言と、社名が入っている。もちろん、皆川データリサーチの、だ。

促うながされて中を見てみると、それは過去から現在までの桜田の素行が綿密に記載された調査結果だった。

それによると、桜田は学生時代からとにかく嘘の名人で、それで大学の単位すら取得していたらしい。

大学生の時はマルチ商法にはまり、舌先三寸で何人もの友人に借金をさせた過去を持っていたり、

セフレと共謀して美人局のようなことすらしていたりしたというから驚きた。

ここ数日の会社での出来事のように、彼は作り話をさも本当のことに装って巧みに人の同情を誘うのが本当に上手い。今回もそれに騙されている社員が多数いる。

（私なんて彼に騙された人たちの中で一番バカじゃない）

新菜は心の中で自嘲する。

彼を好きだった時につかれた嘘は、実害がほとんどない小さなものだったので、惚れた欲目で「仕方ないなあ」と笑って済ませていた。

けれど、今回のような洒落にならない嘘に巻き込まれてしまつてさすがに笑えないし、そんな犯罪的なことに手を染めている男だと見抜けなかった自分……本当に愚かだ。

皆川がそんな新菜を見てタイミングを計つたように、話を再開する。

「それと、あなたと付き合っている間に単発の浮気は、それこそ数え切れないほどしていますね。

そして今回、会社であなたを窮地に追い込んだ理由ですが……他の女性と婚約したからです」

「……え？」

「相手は篠山乃梨子、海堂エレクトロニクスで役員秘書をしている女性ですね」

「ええっ、し、篠山さんと婚約!?」

先日総務課の前でぶつかつた彼女だ。あんな美人と二股をかけられていたのか。

（ある意味光栄……？ って、そんなわけあるか！）

思わず心の中で普段しないようなツツコミを入れてしまった。こんな漫画みたいな展開があるだ

ろうか。

「あなたの会社ではほとんど知られていないようですが、篠山乃梨子は海堂ホールディングスの社長の姪なんです。社長の妹は東日本ロイヤルホテルのオーナーに嫁いでいますので、正確にはその一人娘ということになります。結婚するなら婿養子になることが必須ですが、それさえ吞めば逆玉ですから。桜田もこの結婚は逃したくないでしょうね」

「そういうことかあ……」

新菜はガツクリと肩を落としたが、桜田の目的が分かり逆にスッキリもした。

「篠山乃梨子には『小坂新菜と付き合っていたのは本当だけど、君と知り合う前に別れていたんだ。でもずっとストーカーのようにつきまとつてきて困っている』と話していたようです」

（今度はストーカーか……）

嫌な女の要素をこれでもかと自分に詰め込んでくる桜田の仕打ちに、新菜はうんざりして大きなため息をついた。

「——桜田が私に直接小坂さんに会ってくれないかと依頼をしたもう一つの理由は、私たちの密会写真です。二人が仲睦まじそうにしている場面を撮影し、それをあなたと別れる材料にしたかった。……あなたも私も、桜田史郎にまんまと利用された、ということですよ」

皆川の声には隠しきれない憤りが滲んでいる。それはそうだろう、人間を見るプロが素人に騙されたのだから。

桜田が振るうハンマーにプライドを粉々にされたも同然なはずだ。

そんな彼が受けた屈辱に比べたら、自分のそれなんて些末なものでしかないけれど……

「桜田に別れを告げられた時、小坂さん、水をかけられましたよね」

「え、どうしてご存じなんですか……？ ……って、調査していたんでしたっけ」

「ええ。あの日、あなたにタオルを渡した女性がいたでしょう？ 彼女はうちの調査員です。あまりに酷い仕打ちだったので、接触してしまったと言っていました。本当なら被調査者との接触は固く禁止しているのですが、私の個人的な調査でしたので、そこは例外、ということ」

「ああ！ あの女性ですか！ とても助かりました。よろしくお伝えください」

おどけて肩をすくめた皆川に、新菜はべこりと頭を下げた。

「話は戻りますが——水をかけた件、あれもおそらく桜田の打算が入っています。あそこでコーヒーをかけてしまえば、いくらなんでも女性に対して酷すぎると自分への反発を招きかねない。だから水を選ぶことで、小坂さん自身への被害を軽く見せつつ、憤りを露わにして同情を買うという、ギリギリのラインを狙ったんです」

「史郎くんが、そんな計算までしていたというんですか……？」

「ええ。別れ話の一連の流れを動画にして会社で流布させ、大げさに被害者を装ってみせることで、周囲にこう言わせるんですよ——『あんな酷い女、水じゃなくてコーヒーをかけてやればよかったの』ってね。なんともまあ、悪知恵に長けてますね」

（かなり悪賢い人だったのね、史郎くん……）

分かりやすい嘘しかつけない男だと思いついでいた。けれど、こんなに巧妙に被害者を装うテク

ニックがあつたとは意外すぎて、新菜はかえって感心する。

「それにしても皆川さん、すごいです」

桜田についてもだが皆川の見解にも、彼女は感心していた。

社内で通りすがりに「コーヒーかけられればよかったのに、クソビッチ」と、実際に罵られていたからだ。

「それでも桜田に騙されてしまったのですから、私もまだまだです」

彼が分析したとおりになって驚きを隠せない新菜に、皆川が自嘲した。

「篠山乃梨子との婚約話も含めて、私の部下が桜田いきつけのキャバクラに潜入し、あの男を酔いつぶしてすべてを聞き出しました。その時の音声も残っています。もし報復措置を執りたいのなら協力します。結果的にあなたの名誉を汚す手伝いをしてしまったお詫びをさせていただきます。本当に申し訳ありませんでした」

頭を座卓につけんばかりに下げて謝罪をしてくる。

新菜は慌てて両手を突き出した。

「そんな！ 皆川さんにはなんの責任もありませんから、頭を上げてください！ ……それに、もういいんです。そんな人と結婚しなくて済んだと思えば、私はラッキーだったと思います」

自分に男を見る目がなかったことだけが、ただただ悔しいです——新菜は笑ってそう継いだけれど、その笑顔にほんの少し苦々しさが残る。

「では、とりあえずここまでの経緯で聞きたいことなどありませんか？ 私が知っていることであ